**「ぎゃー」とぼくたちはさけびました。ぼくの家ではたらいている女の人がかわいがっている子ねこがバイクでひかれたのです。おじさんは、バイクの前でじゃれているのがわかっていたのに、わざとバイクを手で押して、子ねこのせぼねをおってしまったのです。ぼくは、すぐに子ねこを手につつみ、女の人のところにつれて行きました。ちょっとでもびょうきをすると、どうぶつのびょういんに、つれていくやさしい女の人でしたが、子ねこのようすを見てもうすくうことことができないと、さとりかなしそうな目をしていました。**

**『かわいそうな　ぞう』で、ぞうのおせわをしていたしいくのおじさんたちも、どれだけかなしく、つらかったでしょうか。そのころのとうきょうは、毎日くうしゅうにあっていました。ぐんは、どうぶつえんのもうじゅたちをころすようにめいれいしたのです。**

**ぞうは、どくのはいったえさをほうりだしてしまいますし、かわがあつくてちゅうしゃもできません。しかたなしに、えさと水をあたえないというもっともひどいやりかたを、選ばなければならなかったのです。日に日に弱っていくぞうを、見ることは、むねがはりさけられる思い、だったことでしょう。**

 **ぼくは、さくしゃがいいたかったことのひとつは、せんそうは、へいしやそのかぞくだけでなく、せんそうにまったくかんけいのなかった、どうぶつやせわをしていたおじさんたちもくるしめたということだと、思います。**

**どうして、どうぶつもどうぶつをかわいがる人もかなしい思いをしなければいけないのでしょうか。**

**ぼくは、にくしみだと考えます。にくしみによって、子ねこがしにましたし、せんそうがおこり、三とうのぞうがしにました。あいはあいを生みますが、にくしみはにくしみしか生みません。にくしみは多くの人をきずつけます。にくしみがなくあいでみちた世の中がくることを、ぼくは強くねがいます。**